

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版



ご主人さま
ツン会長の
メイド奮闘記
でしょ!

小説 夜士郎

挿絵 ピエール☆よしお

プロローグ 意外な僕のメイド様

第一章 第一次接近遭遇。そして……。

第二章 校則違反の拘束えっち

第三章 よるのおべんきよう

第四章 メイドのお風呂ご奉仕！

第五章 恥ずかし放課後プレイ

エピローグ そしてまた彼女と

登場人物紹介

Characters



このえ ゆ き
木絵 夕貴

京一の通う学校の先輩。現生徒会長。落ち着いた物腰で芯が強く、男相手にも物怖じしない。

かしまきやういち
華島 京一

華島財閥の一人息子。将来の跡取りとして大事に育てられている。内気で大人しい。

彼女の目を見て、きっぱりと言う。びた、と不意を突かれたように停止した真っ赤な顔の唇を——京一は自分の唇でおもむろに塞いだ。

(うん、やっぱり)

不意打ちに目を白黒させる夕貴を目前に、胸中で苦笑する。

(攻めるのは強いのに、攻められると弱いんだよな、夕貴は)

突き放そうと手を伸ばす夕貴の、頭上のメイドカチューシャを撫でつつ、ちゅぱちゅぱと啄むように彼女の唇を吸うと、途端に大きな瞳はとろん、ととろけた。触れ合う唇はそのままに、可愛らしく盛り上がっている乳房に手を添えると、

「ふあ……っ」

と、小さくうなじを震わせて反応する。

「夕貴、おっぱいも弱い？」

「なっ……、も、もうっ！ 馬鹿っ！」

怒ったような吊り目に睨み付けられてしまう。と、彼女の手が股間に伸びてきて、半勃ちの肉棒をぎゅっつと掴んだ。

「あうっ!？」

「ご主人様。そんな風に人をからかうものではありませんよ」

にこやかな笑顔でそう言いながら、しなやかな指先でむぎゅうと強く揉まれて、きゅう

うんと切なげな痛みが背筋を駆け抜ける。反面、その猥褻な刺激にむくむくと膨れ上がる肉茎が、股間で立派なテントを張っていた。

「もうこんなに固くしちゃうんだから……。仕様のないご主人様」

手の平で、愛おしげにすりすりとお撫でさすられる。うう、と、掠れるような呻きを発する京一の顔を面白そうに見やると、おもむろに机の下へと潜り込んできた。

「あ、ちよ、ちよつと！ 夕貴っ」

股ぐらに身体をこじ入れて、夕貴は恥ずかしそうにしながらもジッパーを開くと、ちよつぱり冷たい指先で男根を摘み出した。狭苦しい場所に納められていたそれは、メイド少女の眼前でぴいんと元氣よく屹立している。

「ふん、まったくもう。元氣いっぱいって感じね……」

目前でびくびくと脈打つ肉根を見つめる夕貴の瞳が艶めかしく光っていた。

「で？ どうして欲しいのかしら、ご主人様？」

肉竿に指を絡ませて、挑発的ですらある熱い声音であった。

「ごくりと、唾を呑み込んだ。桃色の期待感が胸中に満ちていく。メイド服の美少女が股下に潜み、何かを命じて欲しいと言っている——。そんな夢のようなシチュエーションに、頭がどうにかかなりそうだ。亀頭には早くも我慢汁が水玉を作っていて、海綿体に浮く血管が青黒くぎちぎちと盛り上がっていた。」

潤みゆく瞳で淫猥な肉竿を見つめる麗貌がある。握ったまま放そうともしない彼女の指先を、垂れ落ちたカウパー液が穢していく。その情景にすら、興奮が高まり、肉棒は嬉しそうに膨れ上がっていくのだ。

「ふあ……。大きい……」

そのあまりに卑猥な汚肉塊を前にして、陶然と呟く夕貴。彼女のぼかんと開いた唇を見ていると、汚らしい欲望が、思わず口を衝いて出てしまう。

「じ、じゃあ……。その、舐めてもらえるかな……」

エッチな雑誌なんかではよく見る、フェラチオだ。恐る恐るといった感じで言ってみるところ、夕貴は、股の間からちらりとこちらを見上げて、

「わ……。わかりました。ご主人様……」

こくと頷いて。我慢汁にまみれた男根に向かって、ゆっくりと唇を近づけていく。

小さく震える、桜色の唇。その瞳は怖々とペニスを見つめていて、触れるか触れないかの所で、つ、と立ち止まる。やはり、口で排泄器に奉仕するという行為には抵抗があるのだろうか、躊躇いがちな夕貴の様子に、つい、怖気づいてしまう。

「ご、ごめん夕貴っ……。やっぱり、き、汚いからっ……」

美少女の顔前にはグロテスクに過ぎる、我慢汁に汚れたそれだ。だが、

「な、何を言うのよっ……。ご主人様のを、汚いなんて思うわけないでしょっ！」

急に怒ったように言い放つと、覚悟を決めたように息を吸い、唇を開いたのである。

可憐な美貌を歪ませて、かばあつ、と、唇が唾液の糸を引いて開かれ、漂い出るとろりと生暖かな吐息が、潮臭いカウパー臭に混じり合う。赤く艶めかしい、ナメクジにも似た舌がそこから這い出して、ぞろりと男根をねぶりつけてきたのだ。

その、ざらりとした味蕾の生々しい感触に、腰が跳ねた。

「あ……、うぐうっ！」

呼応して、鈴口からカウパー液の嬉し涙を溢れ出す京一のペニス。潤んだ瞳でそれを見つめる夕貴が、どこか嬉しげな薄い笑みを唇の端に浮かべて舌を這わせると、肉根の表面に唾液混じりの我慢汁がまぶされていく。粘ついた粘液がぬちゃぬちゃと音を立て、弾ける生臭さが京一の鼻先まで匂い立つ。

(ゆ、夕貴が……。か、会長の口が、僕のをつ……)

ペニスを、好きな人のお口で愛撫されている——。刺激的に過ぎるその情景に、こめかみがどくどくと脈動する。排泄器官を口に含ませることに、背徳感すら覚える。

ゆらゆらと亜麻色の髪が揺れ、夕貴の小さな頭は小動物が餌を食らうかの如くである。赤くイヤらしいナメクジが、男根を美味しそうに這いずり回る音が聞こえてくる。

ちゆるうっ……にちゆう……、ぺろ、ぺろ……、くちゅ、ちゆう……。

「ん、ふ、じゆる……。ふ、すごい味、このキャンディー……」

我慢汁でトッピングされた肉棒を味わって、甘く掠れた声であった。

ざらざらとした舌が肉棒を擦るたびに、痒みにも似た甘い痺れに身体がおののく。舌先が亀頭の傘の敏感部分をぐるりと舐め回すと、その痺れは幾倍にも増した快楽となって、京一を悶えさせるのだ。うぶな少女の舌の動きはぎこちないものではあったが、その初々しさになおさら興奮してしまう。

にちゅ、じゅ、じゅるうっ！　ちゅば、ちゅば、じゅちゅっ。

唇を潤す唾液は口中から溢れるほどで、粘っこい卑猥な音楽が激しく奏でられている。まるで耳の穴を舌で舐められているみたいだ。お尻の穴が快感にきゅうと引き締まって、下腹部に抑えの利かぬ情動がじわじわと溜まっていく。

「かい、會長っ……、ちよ、止め……」

女の子のように身悶えしながら、京一は襲いかかる快感に必死で抵抗していた。睾丸の中で、早くも灼けつくような射精感が高まっているのだ。

「ひ、い、くあっ……、う、ああう」

そんな彼を上目遣いに見上げて、夕貴は薄ら笑いを浮かべ、

「んっ……ふ——う……、はあ、もう、……食べちゃお」

そう言って、ぱくりと。大きく開いた唇が、グロテスクな逸物を呑み込んだ。

つい先ほど、口づけを交わした、夕貴の口腔粘膜だ。唾液が泥濘のようにどろどろとた



ゆたう、温かな口中に呑み込まれた感触は、何よりその視覚の過激さと相まって、脳髓を沸騰させるような興奮に舞い上がってしまう。

(う、うわあつ！ 呑んでる、口の中につ！ 呑み込まれてるっ！)

股間に顔を埋め、夕貴の美貌は京一の陰毛に触れんばかりであった。口中を占領する肉根に頬袋を蠢かせ、彼女は艶めく桃色の唇を丸く窄め、肉茎の半ばをきゅっと締め付けてくる。口の中いっぱいの男根から逃げ道を探るように、淫猥な舌が亀頭の下をずるずると這いずって、溢れんばかりの唾液が肉根を生暖かく浸していた。

「口の……、女の子の、はっ、はああ……、口の中……、ふああ……」

夕貴の温かさに包み込まれて、京一はただ陶然と溜息を漏らすしかない。見おろせばそこには、少女の口腔に自分の凶器が深々と突き刺さっている有様がある。

じゅぷ、じゅるう……、にちゃ、ちゅ、じゅるうっ……。

「ん……ぷう……あむう……」

苦悶を抑え込むように、夕貴が喉元で小さく呻く。その微振動すら心地よい。一生懸命に鼻で息をして、呼気が陰毛を撫でるのがくすぐりたい。

「会、長……、気持ち、いい……」

背骨に甘く抱きつく心地よい快樂とともに、意識は緩やかな波に洗われている。ただ口中にあるだけで、いつまでもそこにいたい。そんな思いだ。だが。

——カリっ！

「——！ 痛っ、っちよ、ゆ、夕貴っ！」

不意に亀頭の先っぽを噛まれて、痛みに頭が醒めた。見れば彼女は、悶絶する京一を見上げて実に愉しげなのである。

「んふふ。どほでふか？ ひっふひひた？」

肉棒を頬張ったまま、言葉にならない声が、じんじんと亀頭の菌形に響く。

「な、なにするんですかっ、く、ううっ……」

涙目で抗議するも、夕貴の瞳は愉しそうに輝いて、口中の肉棒をじゅるじゅると音を立てて啜り始めた。頭を前後に動かして、肉棒にさらなる刺激を与えていく。

「ん、ふう……、じゅ、るう……、じゅ、ぬぶ……」

桃色の唇を巻き込みながら肉棒を押し込むと、口腔の上部を亀頭が抉る。頭が後ろに遠ざかれば、ずるずると引きずり出される男根が唇を捲り上げ、裏筋を舌が這い下がる。前に、後ろに。次々と切り替わる快感のポイントに、京一の理性は翻弄されていく。

にちゅう、ちゅ、ちゅぱっ、じゅ、にちやつ、ぬっちやつ！

「くあ、はあっ！ ふ、……うあっ」

唾液とカウパーとに濡れた肉茎の放つイヤらしい音に耳が刺激され、精巢が快感に沸き上がる。紅玉のような唇が、海綿体をきゅっと締め付けて、蜜に溢れた熱い口中では、男

根がぬめぬめと舐め溶かされていく。時折歯先が食い込むのが、またたまらない。

「う、ああっ……、気持ち、いいっ……、よすぎるっ……」

少女メイドに命じてのご奉仕フェラチオ。そんな背徳的なシチュエーションが、快感を何倍にも昂らせる。脳髓を貪り食らう快楽の獣に、意識も理性も食い尽くされていくようだ。陰囊の底から射精感が噴出して、京一はぎいっと唇を噛んでそれに耐えていた。

(く、ううっ……、で、出そうだ……、で、でも、ま、まだ……)

だが、そんな京一の様子を見たのか、夕貴はさらに首を強く前後に振り始めた。

じゅっ！　じゅっ！　じゅっ！　じゅるっ！　ぬちゆるうっ！

激しさを増した前後運動に肉棒を擦られ、快楽が熱いうねりを打って京一に襲いかかってくる。美少女の顔を刺し貫く肉棒は、その舌から歯茎から頬袋から、口腔の全てを乱暴に打ちのめす。メイド少女の自ら顎を削るような乱暴な奉仕は、彼女自身が己をなくしている証拠なのかもしれない。汗ばんで上気する表情は、眉尻もだらしなく垂れ下がりに、上目にこちらを見つめる瞳は陶然と潤んで、射精感に翻弄される京一の姿を、まるで彼女自身の合わせ鏡のように映しているのみであった。

泡立つカウパーと唾液とに唇と顎先はしとどに濡れそぼち、ぼたぼたと幼児の如く涎を垂れ流している。白い喉元を汚し、メイド服の襟元を腐汁の濡れ色に染め上げていた。

「ふ、うんっ、ご、ごふっ、ぬちゅ……、ふうんっ！　ご、ごほっ……」

目に涙を溜めて、苦しげにえずきながら、それでも男根を吸い続ける夕貴の行為に、
(う、ああっ！ もう、だ、っ……、駄目、だっ！)

いまだ経験の少ない純情少年はもはや爆発寸前だ。

じゅぶじゅぶに唾液の絡まる肉茎をざらりと撫で上げていく淫舌が、鈴口の割れ目に突き立てられると、敏感極まる尿道管を舌先でぐじりぐじりとほじくられて――。

「……っ！ つはあつ、そ、そんな所、あがあつ……！」

背筋を焦がし駆け抜ける、灼熱の射精感に、もはや耐えることができなかつた。肛門が引きつれ、亀頭が膨れ上がる。理性は拡散し、それでも、

「夕貴っ！ 出る、出るっ！」

必死の思いで、京一は腰を引き抜いていた。

「きゃっ？」

ちゅぽんと間抜けな音がして、夕貴の可愛らしい声と重なり合う。そして――。

「うあつ――だめ、もうっ！ く、あ、あつああ！」

びゅぱっ！ びゆる、びゆるるっ！ びゅぱあつ！

「んんっ！ ふああ、あああああつ あ、熱う、ふあああつ！」

ぎゅうつと瞳を閉じた夕貴の、その顔面に噴出する白濁液が叩きつけられていた。可憐な花の咲き綻ぶ美貌は鼻面からスペルマシャワーを浴びて、弾け飛ぶ飛沫が黒色のメイド

「嘘っ!? え、もう一時限が過ぎたの?」

「……うわあ。開始の合図が全然聞こえませんでした。さ、さぼっちゃいましたね」

幾つもの足音が、廊下から聞こえてくる。移動教室なのだろうか。

「……外に出れないわね」

「そうですね。二人で出て行くところを見られたら、なんとと言われるか……。というか、会長はその制服じゃあ……」

と、京一に指摘されて、制服の襟元がべつとりと汚れていることに気がつく。

「な、何よこれっ! これじゃあみんなの前に出れないじゃないっ! 京一の馬鹿っ」

「ぼ、僕が悪いんですかっ!」

——というわけで。その後、二人は仲良く屋敷へと退散し、夕貴は入学以来初めて、午後の授業を丸ごとさぼってしまったのであった。

ざあざあと、熱い飛沫を身体中に浴びて、浴場の中に湯煙が立ち上る。全身にこびりつく汗を洗い流して、京一はようやく一息をついた。

学園はまだ授業中だろう。夕貴はというと、さっさとメイド服に着替えている。君枝には、今日は半ドンだと伝えておいた。

「……はは。生徒会の役員が、二人揃ってサボりか」

なんだか、こういうのはワクワクする。さっきの情事の名残が、身体の奥に燻っていて、熱いシャワーの刺激にも神経が昂ってきそうだ。

「ああもう。さっきあんなに出したばっかりだったのに」

若々しい京一の性欲は、早くも股間のを漲らせていた。そうするとなおさらに夕貴の赤めく肌とか、潤んだ瞳だとかが思い出されて、血を熱くさせてしまう。

純情少年にはこれまでの何もかもが刺激的に過ぎるのだ。

「はあ……夕貴、夕貴……」

「呼びましたか？」

「う、うわあっ！」

不意の返答に、すっとんきょうな声を上げる京一である。

「な、なにっ？ どうしたの……どうかされたのですかっ」

「ああいやいや、何でもないですよー」

脱衣場の奥、磨りガラスに透けて見えるシルエットに向かって手を振る。

「そうですか？ ……あの、着替えをここに置いておきますので」

夕貴のちよつと高めの声がお風呂場の中に反響して、それは昼間のツンとした様子とも違うメイドモードである。今は立場が逆転して、自分がご主人様なのだと思うと、なんだか妙な気分になってくる。

「あ、あの、さ。夕貴」

どきどきしながら、声をかける。なんですか、と動きを止めた影に向かつて、
「な……中に入って、背中を流してくれないかな？」

と、言っていた。言ってしまった。お昼の秘め事はまだ理性を桃色に食い散らかしているらしい。ガラスの向こうで彼女が慌てる様子が見て取れる。

「い、一緒に、お風呂に入ってですか？　な、いや、あの……」

昼間はあんなに強気なのに。こうやって不意を突かれると、弱い彼女である。

「そ、それは、ご指示ですか？」

「……うん。そうだよ。ご主人様の命令だ」

内心は冷や冷やだ。夕貴はしばし逡巡するように口を噤むと、

「……わ、わかりましたっ！　め、命令じゃあ、しようがないですからねっ」

と、恥ずかしそうに叫んで。ごそごそとしゃがみ込むと、扉を開いて入ってくる。

暖かくて湿度の高い空気が充滿する室内に外気が流入する。布地もたっぷりなメイド服姿から、ニーソックスを脱いだのだろう、彼女は裸足であった。濡れないようにスカート
の端を掴んで、おすおすとこちらに近づいてくる。

覚束ない足取りに不安を覚え、滑らないようにと言おうとした矢先――。

お約束というかなんというか。メイド少女の片足がつるん！　と後方に滑った。

「きゃっ！」

可愛らしい悲鳴が聞こえたかと思うと、京一の胸の中に飛び込んでくる。不意なことで受け止めきれずに、二人は折り重なるように床の上に倒れ込んだ。

シャワーは雨のように降り注いでいて、それは、京一もさることながら、メイド服に身を包んだ夕貴の全身も濡らしていく。慌てて手を伸ばし、蛇口を閉めた。

「うあゝ、もう、ご主人様、ひどいです……」

胸板に身体を預けたまま、子犬のように眉を垂らしてこちらを見上げてくる。

学園での顔と、メイドとしての顔。そのギャップに目眩がしそうだ。

シックなメイド服は水に濡れて、しなを作る夕貴の身体にぴったりと張り付いている。胸元を盛り上げる、魅惑の乳房の形。重く濡れた布地に締め付けられながらも、重力を感じさせずに跳ね上がるその肉球に、少年の目は惹かれてしまうのだ。

「あ、あの、ご主人様？ 私、着替えて来ますので……」

と、離れようとすると夕貴を引き寄せると、京一は、

「……ね、夕貴。その、おっぱいで洗ってくれるかな？」

「えええっ……。おおおお、おっぱいで、ですか？」

「うん。駄目、かな？」

「……べ、別に。ご主人様が仰るのなら……」

と、夕貴は恥じらいながらも、前を留めているリボンをしゅるりと解く。前掛けを肩から外し、上着のボタンを外して左右に広げ、インナーのブラウスを喉元まで引き上げると、清楚な白いブラに包まれた膨らみが晒け出される。フロントホックのブラジャーの留め金をくつと捻って外せば、ゴム毬のような弾力の、若々しく小生意気な膨らみが、ブラをも左右にはねのけて飛び出してきた。

まだまだ青さの匂い立つ少女の胸には、大きめのグレープフルーツを割って二つ並べたような半円球がある。すべすべとした滑らかな肌は淡く紅潮し、ぴいんと張り詰めた乳房はブラから解放されてもまるで形が崩れずに、先端に咲く小さな実を天にすら向けている、それは理想的なまでの美乳であった。

「うん。それで、洗って欲しいな」

「う、うう、恥ずかしいですね……。そ、それで、ど、どうすればいいのか……」

「じゃあ、ほら。夕貴。後ろを向いて」

そう言うのと、恥ずかしそうにお尻を向けてくれる。京一が足を伸ばして仰向けになり、彼女はその上に犬みたいに四つ足をつく格好だ。スカートの張り付いたヒップは健康的な形を描いていて、手を当ててぎゅむつと挿んでみると固さの残る少女の肉の感触が心地よい。

「きゃっ……、もうっ、これでどうすればいいんですかっ」

「うん。その石鹸をつけて……、挟んで。うん、そう……」

浴室の端に置かれたソーポボトルを手にとると、白い粘液を手にとっておっぱいにべっとりと塗りつける。上半身を預ける形で、京一の腰に覆い被さると、両手でぎゅむつとペニスを肉サンドイッチにしまった。

（うわ……、あつたかい……それに、すごく、柔らかくて……）

ぴんと張り詰めた若肌の感触も、乳房の柔らかな圧力も、それはそれは心地よい少女の肉襦袢であった。男根がまったりと包み込まれて、下腹部には乳房の潰される感触がある。陰囊をつんつんとつく、ほんのり固い刺激は乳首だろうか？

「こ、これで？ よろしいのでしょうか、ご主人様？」

「あ……、う、うん。その、それで、動いて……」

と、声をかけると、夕貴はペニスを压したままの上半身をゆるゆると揺り動かしてくる。ぎこちなく、戸惑いがちな動きだが、肉の狭間の石鹸水がすぐにもぬるりと攪拌されて、胸肉と男根との間でぬめくる泡となり、肉根に淫らな肉洗浄を施していく。

ぬ、ちゆる、にちやつ、にちゆるう、にちつ……。

（ふああ……、き、気持ちいい……。胸の感触がああ……）

なんともいえない、身体中をわななかせる快感であった。

メイド少女の上半身が右に左に移動して、にじゆるにじゆると粘着質な音を奏でると、

京一のペニスは乳房にされるがまま、もみくちやにされてしまう。ペニスの周りはみっちり肉が詰まっついて逃げ場もなく、鈴口から亀頭から肉茎から押し潰されて、それはフェラチオのような強烈な刺激ではないけれど、柔肉に包まれ愛撫される男根からは背筋をさわさわと撫で上げるかのような甘く心地よい愉悅が伝わってくるのだ。

(うわあ……、なんだこれ、なんか……癒されてる？　みたいなの……)

さりとて男根を滾らせる欲望はとめどない、奇妙な甘美感であった。

「ど……、どう、なの？」

「う、うん……、気もちいい。よすぎるよ……」

永遠にこのままでいたいような。そんな気分だった。

肉体的な快感もさることながら、夕貴の自分の胸を使って懸命にご奉仕する姿が、京一の理性を刺激する。目の前にお尻を突き出して、ゆらゆらと揺らしながら、泡まみれの胸の谷間を使つてのパイズリご奉仕。生徒会長にそんなことをさせているだなんて、考えるだけで、精液を暴発させてしまいそうだ。

「……こんなのも気持ちいいの？　ご主人様ったら……」

夕貴が首をねじ曲げて、潤んだ瞳でこちらを見ている。

「なんだかもう……、最高にいい……」

答える京一の声も掠れている。少女の体温が、身体中に伝わってくる。柔く生々しい胸



肉の感触の中に時折粒の固い乳首が亀頭を刺激して、その不定期な刺激がまた、いい。

「ん……、ふあ、ん……、は、あ……あ」

砂糖みたいに甘い声。肉棒に乳刺激を与えて、夕貴も感じているのだろうか？ 左右にある、薄い桃色に染まりゆく生の太ももを、さわりと手の平で撫でてみた。

「~~~~っ！」

ぞくぞくぞくと、少女の腰から背筋が断続的に震え上がる。涙目でそれを堪えた夕貴が、恨めしげにこちらを睨み付けてくると。

じゅぶるうう！ ぐちゅっ！ にちゃああああああつ！

「う、うわあつ！ ちよ、ちよっどつ……っ、くああつ！」

不意に身体の全体を激しく擦りつけてきたのだ。ぬるぬるした少女の、乳房から肋骨から薄っぺらいお腹から、その肉の全てが男根を濃密に愛撫しながら通過していく。糸を引くボディソープが接触面に広がって、滑らかな前後運動を促していく。

「んふふ。こう、いうのは、どう、なの、かしらっ……」

前に。ずるうううううと。後ろに。ぬにゅううううと。膝を伸ばして、縮めて、伸ばして縮めて伸ばして縮めて、尺取り虫みたいな、男根への筋肉ご奉仕であった。

「う、おおっ、うああつ、く、うあつ、ちよっ……」

肉茎に乳房や肋骨の熱い接吻を受けて、灼けるような筋肉に擦られて、快感に身体が悶

える。少女の肢体に弄ばれて肉の狭間でつるつると滑り回るペニスとともに、陰囊すらもすり潰されて、切ないような快感がキュンキュンと頭蓋の中を跳ね回る。たちまちのうちに、男根は充血し、脳髓の奥からとろりとした射精感がこみ上げてきた。

ゴム毬みたいに弾力のある、形よい腕型だった乳房はその原型も留めないほどに変形して、摩擦運動に赤くなつてしまつてゐる。先端の小さな果実が、京一の下腹を擦ると、夕貴は甘い掠れ声を放ち、上気した顔を天に向けるのだ。

「ん、ん、あ、はあ……。先つぽ、気持ち、いいよう……」

まるで、ペニスに抱きついてゐるみたいなメイド少女の姿である。昼間に一度射精してゐるといふのに、艶めかしく濡れそぼつ柔肌の熱い感触に精管を押し潰されるまま、彼女が身体を動すと、こみ上げる精液が、先へ先へと押し出されていく。

「ちよ、もう、夕貴っ……」

京一が、呻く。熱い昂りが額から広がつていく。限界がじりじりと理性を焦がす。

それを聞いた夕貴が、乳肉を両手で握ると、左右から男根を肉饅頭のようにぎゅつと包み込んだ。そして、ごしごしと、手ずからおっぱいを上下に揺さぶり、激しく男根をしごき上げてきたのだ。石鹼水に濡れる白桃が、粘着音を跳ね上げる。

ぬじゅ！ ぬじゅっ！ にじゅっ！ にじゅるううっ！ ぬじゅうっ！

「うああっ、く、ああっ、ちよ、でる、出るからっ！」

そこにいるのは、学園の生徒会長ではなく、もしかしたら、メイドですらないのかもしれない。ただありのままに京一を受け入れてくれる、素顔の彼女を、初めて見たのかも知れない。目に焼き付いて、離れない。愛らしい笑顔。

心の奥から、暖かなものが溢れてくる。少女の全部が愛おしくて仕方がなかった。すると、夕貴は自分でスカートをたくし上げ、大きく股を開く。そして、濡れそぼつ肉襷も淫らな秘裂を、自らの指でくぱりと押し開いたのだ。

糸を引き花開く桃色器官は赤くとろけたゼリーのようだ。どこまでも透明感を感じさせる、美しいヴァギナであった。左右に押し開かれた肉襷にはくすみ一つなく、濡れた割れ目に口を開く小さな穴はひくひくとわなないて、貪欲な涎を垂れ流している。薄い陰毛が恥丘に張り付いた様子までエッチだ。

「さあ、どうぞ、ここに入れて、気持ちよくなってください、ご主人様……」

恥ずかしげな顔で自分の肉花卉を押し開く少女の行為は、たまらぬものであった。

「夕貴っ……。好きだよ、夕貴……」

こみ上げる熱い劣情を必死で抑えながら、夕貴の股の間に割り入ると、うるみの湧き出る源泉に龟头をびとりとあてがう。

「ふうんっ……」

びくんと、夕貴が小さく身体を震わせる。その両膝に手を置くと、京一はゆつくりとべ

ニスを押し込んでいった。尖った亀頭先端が、膣孔をこじ開け、埋没していく。

「ああんんんう、入ってる、入ってきてますっ、ご主人様のっ……おちんちんっ」

経験の浅い未成熟な膣道を拡張され、お臍の裏の内壁を抉られて、夕貴がブリッジするみたいに背中を反らせる。腹腔は内臓が溶けているかのようにとろとろで、蠢くヒダヒダがみっちり亀頭を覆い尽くし、そこを無理矢理に押し進めば、敏感なさきつちよと肉の褸が擦れ合い、ぞくりぞくりと背筋に細い電流が駆け抜ける。

「もうっ……入れただけで、私、こんな、感じて……」

夕貴もまた、感じ始めているのか。戸惑うような声であった。

少女の膣肉の全部が、男根に快楽を与えるためだけに存在しているかのようだ。きゅつきゅと締め付ける入り口も、うねくり絞り上げてくる女の洞も、何もかも気持ちいい。海綿体を削り取るような狭隘な道を掘り進む削岩機が、その最奥をこつんと叩いて、

「んふうっ、あうあっ……、当たり、ました、奥にっ……、んあっ……」

嬉しげな、声がこぼれた。

ぬ、ちゅ、こつ、にじゅっ、こつんっ。じゅぶ、こつ、ぬちゅるっ、こつっ。

(ううっ……、くああっ、気持ちよすぎるっ……)

肛門の締め付けも強烈なアナルセックスも気持ちいいけど、ヴァギナの、肉棒の全部を握りしめ、揉み上げてくるような刺激もまた狂おしいほどの快感を与えてくれる。出して、

入れて。出して、入れて。出して入れて出して入れて——あまりの気持ちよさに、腰が勝手に動いてしまう。いまだ経験の浅い少女の肉は、京一の前後運動に敏感に反応して、胎内を抉り上げる肉槍を強烈な収斂でぐいぐいと締め付けてくるのだ。

「ああうっ、あ、ああっ、ご、ご主人様あっ！ 気持ちいいようっ、あ、ああっ！ 私、私いっ、いやらしいメイドになっっちゃううっ！」

メイドスカートから大きく伸びた、はしたない美脚をぶるぶると震わせて、愉悦の嬌声も高らかな夕貴。赤めく顔と髪の毛を振り乱し、首筋にびっしりと汗を浮かせて、子宮を突き上げる肉棒ノックに腰を跳ね上げる。ぐにぐにと子宮口は押し潰され、溢れ出す熱い蜜液が亀頭を濡らし、肉の狭間でぐちゅぐちゅと卑猥な粘着音を跳ね上げる。

「んんっ、ん、あ、あああっ、あ、……んあああっ！ い、今は、胸はだめえっ」

エプロンをぴんと持ち上げている乳房を握ると、逃れようと身を振る夕貴。布越しにも柔らかく、それでいて弾力のある感触が手の平に返ってきて、ぐにぐにと揉みしだくと少女は足先をピンと張って官能の甘い吐息を漏らすのだ。

「ひ、ああっ、だめっ、奥までいっばいなのに、胸は、胸はあっ……、ふあああっ、んんっ、はひいっ！ ダメ、ダメですう、ご主人様あっ……」

（うわあ……、か、可愛い……）

正常位でのセックスは、愛する人の顔を間近に見ていられる。張りに満ちた生意気おっ

ばいを揉まれて、子宮まで陰茎に貫かれて、それでも夕貴の顔は幸せそうだった。嫌々をするように首を振っていても、ぐうと秘穴を掻き混ぜれば白い喉を晒して甘美な声を解き放つ。犬のように浅ましく舌を吐き出すその顔は、京一しか見られないものなのだ。

ぐ、ちゅ、にちゅ、ぬちゅっ、じゅっ、じゅぼっ、じゅぼっ！

(夕貴……、夕貴いつ、夕貴っ……)

頭の中は真っ白で、茹でられているみたいに熱く興奮している。こみ上げる激情を抑えることもできずに、繰り返すピストン運動はその激しさを増して、軋むベッドの上で少女の身体をガクガクと揺さぶる。骨盤と骨盤がごつごつとぶつかり合い、少女膣で摩擦される肉棒が火を噴きそうだ。脊髄をじわじわと這い昇る射精感が前後運動の勢いをいや増し、メイド少女は被虐の人形のようにただ弄ばれるのみであった。

「ひああう、激しい、激しいっ、あ、ああ、壊れる、壊れちゃうっ、お尻みたいに壊れちゃうっ！ん、んんっ、くひいんっ、は、はああああああっ！」

乳房の先端が固くしこって、手の平で揉みながら指先で摘み上げると、夕貴の肢体が感電したみたいにびくんと硬直する。そうすると、

(くあっ、な、中が、締まって……っ)

京一が身悶えるほどに、膣道の中でペニスを握り潰されるのだ。

皺だらけのメイド服はどこもかしこも汗まみれで、ぷんと淫らな臭気を放っている。い

つもの澄まし顔もどこへやら、だらしなく崩れた顔は淫蕩の悦びに笑みを浮かべ、涙を流し、涎を垂らし、悩ましげに悶えるのみ。

(僕の、僕の、夕貴っ……)

ちかちかと火花散る脳裏を、制服姿の夕貴がよぎる。その夕貴が今や淫欲の権化と成り果てて、京一のために自らの贅肉を差し出すメイドご奉仕。陰茎と蜜壺がぐっちゅぐっちゅと音を爆ぜ、蠕動する膣道が吸盤のように肉棒に吸い付く。少女も絶頂が近いのだ。夕貴の中の雌が、京一の子種汁を求めて、物欲しげに蠢いているのだ。

「あ、あうんっ、ご主人様、好き、好き、好きいつ！ご主人様あ！」

「ぼ、僕もっ、ぼくもっ！夕貴っ！」

言葉が絡み合い、反響する。高まりゆく高揚感が、二人の熱を高めていく。

「あ、ああ、私、私、どこかに、いなくなつて……！ご、ご主人様あっ」

(う、うわああああっ！し、締まる締まる締まるううっ！)

夕貴の腰が、ぐうっと持ち上がった瞬間。凄まじい締め付けに襲われた。顔中を淫蕩に引きつらせ、がくんがくんと苦しげに腰を跳ね上げて、弓なりにのたうつ肉の収縮に、男根が揉みに揉まれる。しなやかな肢体を仰け反らせて細腰が激しくのたうち、膣孔に握りしめられたペニスが縦横に弄ばれると、もはや少年の我慢も限界であった。

(ダメだっ、もう、もうっ……、でる、でる、クウ……、ううう！)

精液が堰を切る。精管の中を熱く駆け上っていく。白めく頭蓋の裏で、脳漿が沸き、頭骨がぱきぱきと音を立てる。迸る快楽の渦に、身体中が硬直する。もう何も考えられず、ただただ子宮口に強く鈴口を押しつけ——少女の胎内で、思い切り爆発した。

「ぐううっ……、うおおっ、ああっ！ 出すよ、出すよっ、夕貴いいっ」

どびゆるびゆるびゆるびゆるびゆるっ！ びゅくるうううううっ！

「はひふあっ!? あ、あづい、ひ、く、くああひいあああああ~~~~っ！ いく、いぐう、私、中に、熱くて、イっちゃいますうううううっ！ はあああああっ!!」

足の指先までがぴいんと張って、美麗な髪をシートに擦りつけ、顎を反りかえらせ、夕貴は全身に襲い来る何かにただ翻弄されていた。少女の腹腔が灼熱し、うねる肉襞に亀頭は潰され、子宮に直接注がれる子種汁が逃げ道を求めて入り口まで逆流する。

びゆるるっ、ぶじゆるるるうっ！ ばびゆる、びゅくびゅくっ！

（う、お、……、おかしくなる、こんなに出たら、おかしくなるっ……）

「あ、う、あ……ま、まだ出てるう……、熱い、のが、いっぱいいいいい……」

異常なほどの量であった。数日分を溜めてもこれほどにはなるまいと思えるザーメンを、ひたすらに夕貴の中に解き放つ。収まりきれぬ白濁が肉輪の隙間から迸り、少女のアナルまで濡らしても、なおごぷりごぷりと湧き出す。

「ご、ご主人様あ……。もう、お腹なかいっぱいです……。お、お許しくださいいい……」

びくんびくんと陸に打ち上げられた魚のように、夕貴は子種射精絶頂に何度も身体を打ち震わせる。美々しい手足に汗を浮かべて、可憐な肢体を痙攣させ、夥しい量の肉汁を下の口で受け続けている。もはや白目すら剥いて、舌を吐き出し、口角泡を唇に浮かべて、ただただ桃色アクメの波に打ちのめされるメイド少女であった。

「は、はああり、あ、夕貴、い、くはあっ……」

ぴゅぴゅと、最後の一滴まで胎内に注ぎ込む。ザーメンと愛液とに蜜壺は溢れ、ずるりとペニスを引き抜けば、どぴゅると尿のように白濁液が噴出し、勢いがなくなってもなお、どろお……と、秘穴から溢れて少女の股間を流れ落ちていく。

雄の生々しい匂いが、二人の股間から立ち昇る。

「ふ——、う……」

精も根も尽き果てて、ぐったりと夕貴の身体に覆い被さる。胸板に、夕貴の荒い呼気が伝わってくる。少女の体温が、伝わってくる。それが愛おしくて、いつの間にか、彼女の身体をぎゅっと抱きしめていた。

「……ご主人様……」

夕貴の両腕が背中に戻って、二人の身体が強く抱き合う。いつまでもいつまでも、こうしていたい。ずうっと彼女と——一緒にいたい。

その唇に口づけをする。くすり、と夕貴が笑う。



「なんだか、ご主人様というより子供みたい」

「……あはは」

そんなことを喋りながら。二人はいつまでも、抱き合ったままであった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>